

『光明日報』（1959-1966）掲載孟浩然関係論文訳注稿

Articles on Meng Hao-ran reported in Guangming Ribao (1959-1966)

川口喜治

Yoshiharu KAWAGUCHI

- 本稿は、下記の『光明日報』に掲載された孟浩然に関する論文の訳注である。また拙稿「新中国成立から文革発動までの孟浩然研究について——『光明日報』掲載論文を中心に——」（『山口県立大学国際文化学部紀要』13、2007年）でその一部を紹介したものの全訳である。
- ①紅小兵「王維孟浩然的作品如何評價？華中師院中文系在教學中展開討論」（1959.3.20學術動態）
- ②路坎「有沒有選“春眠不覺曉”這首詩？」（1959.4.5文學遺產254）
- ③《文學遺產》編輯部「關於孟浩然及其《春曉》詩的爭論——來稿綜合報導」（1959.6.28文學遺產267）
- ④文川「從《春曉》和《靜夜思》來談抒情短詩問題」（1960.2.28文學遺產302）
- ⑤経盛鴻「我對《春曉》一詩的新認識」（1966.6.5文學遺產554）
- 訳注は、紙幅の都合上、最小限に留めた。なお訳文中の訳者による注釈・補足は〈〉内に示した。

-
- ①「王維・孟浩然の作品をどのように評価すべきか？華中師院中文系が教學において討論を展開」（1959.3.20）

本紙武漢発

華中師範学院中文系は、2月下旬から3月上旬にかけて「唐宋文学」を教授する時間に、唐代詩人の王維、孟浩然の作品評価の問題について熱のこもった討論を繰り広げた。討論に参加した教員と2、3年生の学生は五百名余りであった。

王維、孟浩然是現實主義詩人であるか、それとも反現實主義の詩人であるのか。これまでは二人が現實主義詩人であると基本的に認められていたが、この度の華中師範学院中文系の討論においては、それに対して大きな意見の相違が生まれ、王維と孟浩然が基本的には反現實主義の詩人であるということになったのである。

討論の過程で、多数の人が王維と孟浩然是基本的には反現實主義詩人であると考えた。このグループの論点は下記の通りである。

王孟が生きた時代の状況、二人の出身階級、政治的地位、二人の思想体系と作品の全般的な傾向などから分析すると、王維の「晩年唯好靜、万事不關心く吾が晩年はひたすら静けさを好み、全てのことに心がひかれない」（「酬張少府」）「世事浮雲何足問、不如高臥且加餐く世の中のことは浮雲だから問題にするまでもない。そんなことより俗世に超然とし、しっかりと食事をする事だ」（「酌酒与裴迪」）「一生幾許傷心事、不向空門何処鎖くこの生涯、どれほ心を傷めたことであろう。仏門以外にどこでこの傷を消し去ることできょうか」（「嘆白髮」）、孟浩然の「祇忘守寂寞、還掩故園扉くひたすら孤独を守り、やはり故郷の家の門をとざすことにしよう」（「留別王維」）は、すべて二人の地

主階級としての孤独と寂寞、悠々自適の思想と感情を表現している。両者のいくつかの田園詩、例えば王維の「渭川田家」、孟浩然の「過故人莊」などは、すべて農村を美化し、階級矛盾を覆い隠しているのである。とりわけ王維の詩における「薄暮空潭曲、安禪制毒龍く一人の僧がたそがれ時の人気がない潭で、座禪を組んで煩惱を抑えている」(「過香積寺」)、「一心在法要、願以無生獎く上人の心はひたすら仏法の要義にあります。無生の理を衆生にお勧め下さいますように」(「謁^{せん}璿上人)」などは、さらに彼の仏教思想を大いにまき散らし¹⁾、深刻な思想的毒素を含んでいる。「少年行」「老将行」「隴頭吟」などの王維の初期のいくつかの詩には、まだ多少は現実的意義があるけれども、主として王維のしばしも飽くことのない立身出世の欲望²⁾と彼が発する悲憤が見られるので、それらに対して過度の肯定をしてはならない。したがって王孟詩歌の全般的な傾向から考えれば、すべて現実を粉飾し、現実を歪曲しており、支配階級に完全にとけ込んでいるのである。二人は基本的に反現実主義詩人であると言わなければならない。

別のグループは以下のように考えた。孟浩然是王維と同等に扱うことはできず、孟浩然是王維と同じ反現実主義詩人と言ってしまうのは公平性を欠く。その理由は、王維は「安史の乱」を経験しているが、孟浩然是689年に生まれて740年に死んでおり、彼の創作活動の全ては「開元の盛世」にあり、「安史の乱」という重大な歴史的事件にまったく遭遇していないということである。このため、孟浩然の作品には当時の民族矛盾、階級矛盾が映し出されておらず、また杜甫のような現実主義の叙事詩を書いていないのは、理解できることなのである。

しかしこのような意見に同意しない人は次のように考えた。ある作家とその作品を正確に評価するのであれば、もとよりその詩人が生きた時代の状況と密接に関係づけなければならないが、この時代状況という点だけを一面的に強調してはならない。やはり作者の出身階級、その世界観と作品の全般的傾向に着目しなければならないのである。しかもいわゆる「開元の盛世」は、封建社会という屍を覆う華麗な死に装束にすぎないのである。事実、当時の複雑に錯綜した社会矛盾は、根深いところで醸成され激化しつつあったのである。孟浩然是この本質的な社会問題をその詩作に映し出すことは決してなかったのであり、当然のことながら反現実主義詩人であるのだ。

討論の過程で、更に「山水詩」の理解と評価の問題にも触れられた。ある人は次のように考えた。王維の詩歌には宗教を吹聴³⁾したり、為政者に追従してその功績や恩徳をたたえたり、現実を粉飾したりする作品のほかに、「観獵」「終南山」などの「山水詩」が一部あり、それらは肯定しなければならない。「子供を汚水と一緒に撒くく価値あるもの(=山水詩)を価値のないものと一緒に否定する」ことをしてはならないのである。彼らの考え方はこうである。これらの「山水詩」は単純な客観的描写であり、特定の芸術的手法を有し、しかも形象が思惟よりもまさっているために、作者がその主観においては消極的な退隱の人生哲学を吹聴することを意図しているのだけれども、作品の客観的な効果からするとそれが明らかにはなっていない。かような「山水詩」には社会的意義が全くないけれども、美学的意義はあり、読む者にある種の美学的な味わいをもたらすことができるため、やはり肯定すべきである。また次のような意見を出す人もいた。階級が異なっても、特定の条件下では、彼らの思想と感情は全く相通ずることができる。例えば徐悲鴻⁴⁾の「奔馬」は、無産階級が鑑賞しても「奔馬」であり、資産階級^{ブルジョア}が鑑賞しても同様に「奔馬」なのである。それ故、異なる階級の思想と感情を絶対的に対立するものとして見做すことはできないのである。

討論がくり返される中で、最終的には意見が次第に一致してゆき、王維、孟浩然是基本的には反現実主義詩人であることが認められた。しかし「山水詩」の美と階級性の問題、叙情詩が典型性を持つかどうかなどの問題については、更なる研究に待つこととなった。

この度の学術討論は、まず主任講師の教員が作者とその作品について全般的な啓発のための講義を行ない、その後で、指導教員の指導の下、小グループに分かれて討論をくり返し、更に主任講師が各グループが討論で導き出した異なった意見をまとめ、中間総括を出し、大会を行なって討論を展開し、

それぞれの意見の論点を明示し、「百花齊放、百家争鳴」の精神を十分に発揮したのである。教員も学生も意欲に満ちあふれ、積極的な発言がなされた。討論の前には全員が準備をし、参考書籍を読んでいた。

(紅小兵)

[注]

- (1) 「まき散らす」。原文「宣揚」。この語は、悪いことを広く知らしめる場合に使用されることが多い。
- (2) 原文「他暫時還不能満足其向上爬的欲壑(よじ登ることに飽くことがない欲望の谷)」
- (3) 注(1)に同じ。
- (4) 1895.7.19-1953.9.26。江蘇省宜興県出身の油絵、中国画家、美術教育者。新中国の美術として、大衆が理解できる写実主義美術を推進、教育。特に馬の絵で有名。『岩波現代中国事典』『徐悲鴻』(田所政江執筆、1999年)参照。

②路坎「春眠不覚曉」詩は選ばれたのか? (1959.4.5)

少し前に私は一年余り会っていなかった年配の同志を訪ね、対面した後どういいうわけか『新編唐詩三百首』¹⁾の話題になった。彼は私に新編本が「春眠不覚曉」詩を選んだのかどうか尋ね、更にこう言った。「私がどうしてこの詩のことを尋ねたいのかと思う? 君は知っているね、私たちの郷里でこの数句の詩をどれだけたくさんの人が熟知しているかということ。この詩は旧選集〈清・蘅塘退士撰『唐詩三百首』〉には載っていたのだよ。」その後、私はすぐに調べてみたが、あいにくと新編本にこの詩は採られておらず、道理で年配の同志がこの問題を心配したはずだった。

一首の詩が入選するかどうかは小さなことではあるが、ひとりの古代の作家と作品の捉え方に関連してくるのである。中国文学史上に確かに次のような人たちがいたのは周知のことである。自らは労働に参加しない、あるいは少しだけしか参加せず(当然労働人民とはいえない)、労働人民に対して共感することは多くはないが、人民の利益にならないことも何ひとつしたことがない。彼らは主な精力をひたすら田園を描いたり山水を詠ったりすることに注ぎ、流派を作った。彼らのこのような作品は「山水詩」と呼ばれている(私たちの文学史において、山水詩の中のすばらしい作品は私たちの文学遺産の一部である)。例えばこの『春曉』と題された詩の作者・孟浩然是、この流派の詩人の中に数えることができると思われる。

この孟浩然という人は、かつて私たちが古い年画で目にしたのは小さな驢馬に乗って「踏雪尋梅く雪を踏みしめ梅の花をさがす」姿²⁾で、それは本当に世俗の人を超越した味わいがあるように思えた。しかし実際は孟浩然もともと立身出世を思い、立身出世を遂げないとみるや不満をぶちまけ「不才明主棄、多病故人疏く才能がないために皇帝陛下に見捨てられ、病気がちで友人とも疎遠になってしまった」く「歳暮帰南山」といったことを言い、その後、思い切って山水の間に心を寄せたのである。孟浩然がこのようにすると、その影響はおそらく小さくはなく、李白でさえも「吾愛孟夫子、風流天下聞。紅顏棄軒冕、白首臥松雲く私は孟先生がこよなく好きで、その風流は天下に知れわたっています。若い時に官僚への途を棄てられ、白髪になるまで松や雲に囲まれた隠遁生活をしておられます」³⁾と彼を称えた。この人は当時の社会に対して多少の不満を懐いていたと私は考える。少なくとも自分が埋没させられたという不満はたいへんはっきりと表現されている。この不満の感情に孤高さが加わった結果、彼は旧社会とそぐわなくなったのである。歴史上、支配階級と協調しないという態度にはかなり断固としたものもあつたり(陶淵明のように)、それほど積極的でない態度もあつたりしたが、孟浩然の場合は後者にあたる。孟浩然がこのような人物であるからこそ、この『春曉』のような詩を作ったのである。そこに描かれたのは自然風景ではあるけれども、その風景は詩人が愛好するものを自己の感情をフィルターとして描いたのであるから、結局、詩は写真くありのままの姿

とは別物なのである。この詩は一見、花鳥を描いているが、その実、突き詰めて言えば孟浩然の孤高さや現実に対する不満の感情とつながりがあるのだ。当時の政治支配に不満を持っていながらも、それに反抗できない場合に、山水花鳥を詠ずることに向かうのは、封建社会の一部の知識人の思考パターンに合っているのだ。これは文人が山水（絵に人物は描かれない。人物を画くとその絵を汚すと考えられていた）を画いたり松竹（節操を強調する）を画いたりするのと同様の理屈である。

この問題については、支配階級の政治的嗅覚がたいへん鋭敏なこともある。例を挙げるならば、蘇東坡の『水調歌頭』に「我欲乗風帰去、又恐瓊樓玉宇、高处不勝寒。く私は風に乗って月の宮殿に帰りたいと思うが、玉でできた月の宮殿があまりにも高い場所にあり、寒さにたえられないのではと心配でもある」という句があり、宋の神宗皇帝はこれを読んで称讃して「蘇軾終是愛君く蘇軾は結局は君主を愛しているのだ」と言ったのである⁴⁾。

ならば封建社会の知識人が孤高であり、あるいは山水の間に心を解き放すのは一種の政治的態度といてよいであろうか。答えは当然その通りだ。これは表情がわからないようにメイクアップされた一種の政治的態度であり、この種の政治的態度の特徴は見かけが政治とは無関係のようによく表現されていることであり、その政治性はまさしく政治から「脱離く関係を断つ」することなのである。このような態度は、封建社会においては幾分かは進歩的な意義を持つこともあり、そのすべてを否定することはできないと思われる。というのは、この態度は旧社会に対して何ら変革作用をもたらさなかったけれども、やはりどう考えても悪人とぐるになって悪事を働くよりはすばらしいからである。たぶんこの点も人民が孟浩然になお好感をもち続けている理由であろう。

当然このような考え方は、古代の一部の作家の思想に対しての分析にすぎない。またこの考え方は孟浩然にもあてはまるけれども、山水詩あるいはこの『春暁』に適用することによって更に多様に更に直接的となるのは、やはり風景に対する描写においてこれらの詩が私たちに与える美の味わいという面である。

このような小さな詩を読むと、すぐに齊白石⁵⁾の絵画を連想できる。齊白石の絵画にはカニによって旧社会において好き勝手に横暴をはたらいた人たちを嘲罵するものがある。これは当然、齊白石の主要な面の一つではあるけれども、彼の絵画に人気があるのは、その絵画が決してこの方面だけにとどまらないからだと言わなければならない。例えば彼がその作品で自然美を明らかに示した面にも好感がもたれている。齊白石が横暴をほしのままにした人に対する憤懣を表現したのは肯定しなければならない。しかしそれと同時に彼の芸術がこの分野を表現することに制約があったことも私たちは知っており、まさしく私たちがこの制約を理解しているので、鑑賞者も多くの政治問題を表現することについて彼に更に多くの要求を出すことはほとんどなかったのである。

ここには異なる題材に対する要求についての問題がある。古典文学作品について、重大な題材にそれ相応の要求があるとしたら、重大ではない題材（山水詩や花鳥詩などを含む）に対しては重大な題材に対するのとは違った要求もあるべきなのだ。もし花鳥詩に対して叙事詩く原文「史詩」。ここでは特に杜甫の社会詩・人民詩のような作品を指していると考えられる）のような豊かな内容を要求するならば、それに応えることができないのは当然である。

孟浩然のこの詩全体「春眠不覚暁、处处聞啼鳥。夜來風雨声、花落知多少。」をもう一度見てもよいだろう。これはやはり読むに値する詩であり、二十の文字が生気にあふれた春の朝の光景を描き出している。朝に鳥が鳴いており、昨夜の風雨の騒がしさが思い出され、さらに花が散ったのを想像している。その描写は精彩を放ち、想像の余地がかなり多く残され、作品のよさを見出すことを読者自身にゆだねるのである。このほか比較的貴重であるのが、この詩が話し言葉のようにわかりやすいということである。この詩は小さな風景画のようであり、人々の美的要求をある程度満足させるはずである。これはおそらく孟浩然と同じ階層く知識人など階級は違っても同じような特徴によって形成される社会集団く感情をもつ人には更に大きな何らかの影響を生み出すはずである。ただ私たちにと

って「隠士」の作品ではあるけれども、私たちを連れて人間社会を離れようとすることは決してない。

まとめると、孟浩然を如何に高く持ち上げようともそれは自ずと間違いであるが、抹殺する(原文も「抹殺」。完全に否定する)必要もないと私は考える。『春暁』のような詩を詩の選集に多く選ぶ必要はないが、選んだとしてもそれがそのまま政治的基準を軽視しすぎた態度であるということにはならない。というのは、上述のように、この詩は私たちにとっていくらかは益するところがあるからだ。たとえそれがちっぽけな役割であったとしても。私たちの生活はたいへん幅広い、人々の趣味も多方面にわたる。山水詩の鑑賞を私たちの生活の一コマにしたとしても、何かよくないことがあるだろうか。

〔注〕

- (1) 鄧拓編、1958年12月、中華書局。その序文には次のようにある。「旧選集の三百十首の唐詩の中で、その半数以上が、政治的には封建的支配を擁護し、思想的には現実逃避を提唱し、芸術的には韻律と形式を重視した作品である。」「旧選集の悪影響を取り除くために、新しい選集がそれに代わらなければならない。」「新選集編集の目的は、選定された詩が今日の人民に奉仕することにある。」「選定には政治的基準を第一とし、芸術的基準をそれに従わせ、政治的基準に統合する。」政治的基準としては「労働人民を代表する詩歌」「封建地主・貴族の支配階級を代表する詩歌」「人民性」「進歩性」「革命性」「妥協性」「落後性」「反動性」といったことが挙げられている。
- (2) 小川環樹・山本和義『蘇東坡詩集第三冊』(筑摩書房、1986年)巻十二「贈写真何充秀才」詩の「又不見雪中騎驢孟浩然」句の注に、『四河入海』所引の南宋嘉定六年刊(1213)・景定三年(1262)補刊『施注蘇詩』の「世に孟浩然が『天に連なりて漢水闊し』の図有り。驢に騎りて詩を吟ずるの状を作す」を引く。また北宋から南宋にかけての人・董道撰『広川画跋』(巻二)に「書孟浩然騎驢図」がある。南宋にはすでに孟浩然が驢馬にのる図が画題となっていたようである。
- (3) 「贈孟浩然」。原文は「紅顔」を「孔顔」に、「軒冕」を「軒冤」に誤る。
- (4) 蘇軾の「水調歌頭」は「丙辰中秋」の序ではじまるもの。ここでは「瓊樓玉宇(玉でできた月の宮殿)」を朝廷に喩えていると解釈する立場とっている(佐藤保『宋代詞集』(学習研究社、1986年)参照)。またこの挿話は、例えば、南宋・祝穆撰『古今事文類聚前集』(巻十一)天時部・八月・「坡詞愛君」に南宋・鮑陽居士撰『復雅歌詞』なる書物所載のものとして見える。
- (5) 1864.1.1-1957.9.16。湖南省湘潭出身の芸術家。木匠(指物師)出身の人民芸術家として毛沢東に気に入られた。文人画家が決してやらない虫やエビなどの細密描写は独自のものである。『岩波現代中国事典』「齊白石」(松村茂樹執筆、1999年)参照。

③「孟浩然と『春暁』詩に関する論争 — 投稿総合記事」(1959.6.28)

本紙文学遺産第254期に路坎同志の文章「『春眠不覚暁』詩は選ばれたのか?」が発表されてから、六編の文章が続けて寄せられた。それらはみなそれぞれの側面から、路坎同志の論点に対して異なった意見を出している。これらの文章の結論はほぼ一致しており、それは、この『春暁』という詩は今日の読者にとって吸収に値する有益なものは何もなく、この詩が『新編唐詩三百首』に採られなかったのは全く正しいというものである。

一首の詩が入選すべきか否かは、特定の小さな問題であると考えられ、討論を繰り広げる意義は大きくはない。しかしながら路坎同志の文章と編集部が届いた文章は、古代の作家、作品の研究に関わるいくつかの比較的的重大な問題に及んでいるため、特に投稿に基づいてこの総合記事にまとめて発表し、読者と研究に従事する者の参考に供するものである。

一、文学作品には中間性作品⁽¹⁾はあるのか

投稿の中には次のような考え方があった。中国文学は、文人による作品が登場して以来、現実主義

と反現実主義という二つの路線の闘争というかたちとなって現われている。前者は、ある程度人民の立場に立ち、人民の思想、要求や願望を表現し、ある程度社会の前進、文学の発展を推進するはたらきをした。一方後者は、人民の要求や願望に背き、封建的支配を維持する側に立ち、社会の発展に対しては阻害作用を起こし、文学の発展に対しては破壊作用をなしている。さらに政治において中間的立場がないのと同様に、文学作品においても中間性の作品はない。何故なら階級社会においては人は階級に属するため、いかなる作家の作品もすべてその作家が属する階級の意識や感情の現われだからだ。階級を超えた人が存在しえないのと同様に、階級を超えたいかなる文学作品も存在しえないのである。作家はおしなべて自分自身や階級集団の要求に基づいて創作に従事するのである⁹⁾。

このような論点を持つ同志は、「自らは労働に参加しない、あるいは少しだけしか参加せず（当然労働人民とはいえない）、労働人民に対して共感することは多くはないが、人民の利益にならないことも何ひとつしたことがない」という人たちが中国文学史上に存在するという事に同意しない。封建文人について言えば、出仕するか、退隱するか、支配階級に向かって闘争を繰り広げるかであり、階級の烙印を押されていないものはない、と考えている。孤高をもって自任する中間派などあるはずないし、ありえないのである。その主観的な願望がどうであれ、客観的には、ある階級に奉仕しないのであれば必ず別の階級に奉仕するのである。

孟浩然という人物に対する見解に上述の考え方をあてはめると、幾人かの同志と路坎同志の意見にやはり食い違いが出る。路坎と意見が異なる同志たちは次のように考える。孟浩然是当時の政治に対して不満をいただき、「不才明主棄、多病故人疏」、「欲濟無舟楫、端居恥聖明くこの湖を渡ろうにも舟と楫が無く（仕官のつてがない）、つね日頃より皇帝陛下の明德に恥じ入っております）」、「当路誰相仮、知音世所稀く権力者で私に力添えをしてくれる人などおらず、私の真の才能を理解してくれる人も世間にはめったとしない」く順に「歳暮帰南山」「臨洞庭（望洞庭湖贈張丞相）」「留別王維」くというようなことを言ったこともあるが、このような不満は単に、個人の願望がかなえられないときの愚痴なのである。ここからはせいぜい当時の知識人の抑圧された状況がわかるだけであり、孟浩然が当時の支配者集団と暗黒の現実に憎悪の感情をどれほど持っていたかを知ることはできない。歴史上、多くの知識人が個人の懷才不遇により、現実社会を憎んでいた。だからこそ、その同情を人民に向けた知識人も少数はいたけれども、孟浩然にはそのようなことはなかった。孟浩然是退隱したが、悪人とぐるになって悪事を働く、つまり支配階級と協力することを望まなかったわけでは決してない。実際は協力が実現しなかったので退隱せざるを得なかっただけなのである。孟浩然が孤高であり、あるいは山水の間に心を解き放つのが政治から「離脱する」という一種の政治的態度であるとするに、路坎と意見が異なる同志たちは同意しないし、その態度が「幾分かは進歩性を持つ」とすることにも同意しない。投稿の中にも孟浩然の退隱が「以退為進く退くことを前進とする」の「終南捷徑く唐の盧藏用が終南山に隱棲したことにより高士として官位をえたことから、隱棲による仕官の近道を意味する」を歩むものであると考える人もいた。

二、どのように古代の作家、作品を評論するのか

投稿の中には、古代の作家、作品の価値や是非について判断するには、その作家の人民に臨む態度がどうかという唯一の基準に必ず依拠しなければならないと強調する同志がいる。彼らは、孟浩然の処世態度が「北山白雲裏、隱者自怡悦く北の山の白雲の中で、隱者のあなたは自適の生活をされている」(『秋登蘭山寄張五』⁹⁾)であり、心穏やかに満ち足りた隱棲生活を自らが歌い上げるのを除いたならば、それ以外の内容を探しあてることがほとんどできないと考えている。孟浩然の山水に心を解き放つ描写は、孟浩然個人の気持ちのなながしかの流露でもあるのだが、その思想性について言えば、肯定に値する進歩的な意義はいくらもない。とりわけ『春暁』詩は、私たちの分析批判の反面教材にしかなりえない。この同志たちは、『春暁』の意図は惜春にあるとする。つまり、春が去り

花が散る描写を通じて作者の落ちぶれて頹廢した気持ちを言葉に表わしたのである。詩では「処処聞啼鳥」がかなり生き生きと春の活気に満ちた様子を描き出しているほかは、「春眠」「花落」はどれも優美な絵を構成できていない。それとは逆に、有閑階級のものぐさで、のんびりと消極的で、退屈な精神の有り様を表わしているのである。

山水花鳥詩が美の味わいを与えるかどうかという問題については、投稿中の意見は全般的にそれに肯定的であった。しかしいかなる作品を評価するにも、政治的基準という動かすことのできない第一の原則から離れてはならない。当然、作品の芸術性も評価しなければならないが、描写対象が特殊であるからといって芸術的基準を第一に置くことはできず、両基準全体にわたる具体的な分析が求められるのである。さらには、美の味わいについても具体的内容を離れて抽象的に論ずることはできないという意見を出す同志がいる。そして齊白石の絵画と孟浩然の詩とを比較的に分析し、齊白石の花鳥虫魚は生き生きと真に迫っており、没落階級の退屈な気分はないとする。画家は作品の中で花鳥虫魚に性格、表情態度や生活の気分を与え、強烈な生活の息吹と楽観主義精神に満ちあふれている。その絵を見れば、命の美しさ、生活の豊かさと多彩さを感じ取ることができ、それによって人々は刺激され、生活をこよなく愛し、人生を心から愛し、人生に対して積極的な態度を取るようになるのである。しかし『春暁』詩を読んでも「私たちを連れて人間社会を離れようとする」ことは必ずしもないとはいえ、おそらく私たちが更に多くの社会の現実に関心を寄せるようにはならず、だらけてのんびりした生活に浸り、意気消沈して元気が出ない精神状態に陥ることになるのである。このような意見を持つ同志たちは、階級が異なる人たちは自然世界の鑑賞においても異なった観点を持つと考えている。封建的知識人が美と考えたものは、労働者や農民という大衆が必ずしも美とは考えないのである。向上しようと奮起する人たちは、『春暁』のような沈んだ情緒もまた美とは決して考えないのである。

三、作品の社会的影響に関する問題

投稿の中には、路次同志が述べた、孟浩然の影響はおそらく小さくはなく、李白でさえも「吾愛孟夫子、風流天下聞。紅顏棄軒冕、白首臥松雲」⁽⁴⁾と彼を称えたという考えに同意しない同志がいる。その同志は次のように考える。李白が『贈孟浩然』詩を書いたのは、ちょうど彼が「酒隱安陸、嵒跼十年く安陸で酒浸りの日々、思い通りにならないこと十年」く「秋於敬亭送從姪崑遊廬山序」の時期であり、彼には遠大な政治的抱負があったが、それを実現することができず、そのため当時李白は「少年不得意、落魄無安居、……常時飲酒逐風景、壯心遂与功名疏く若い頃、意にかなわず、おちぶれて安んじた暮らしがなかった。……飲んだくれで、美しい風景を尋ね歩き、意気だけ盛んで功名とは縁遠かった」⁽⁵⁾く「贈從弟南平太守之遙二首」其一」という悲哀をいだいていた。これは孟浩然の「不才明主棄、多病故人疏」という心境と相通ずるところがあり、それ故、李白は孟浩然の隠棲して自適のふるまいに対して羨望と尊敬を表わしたのである。私たちはこの時の李白に対して過大評価してはならない。当時の李白の作品は、大半が個人的な感情の流露でもあり、のちに彼がしばしば打ちのめされたことにより社会の暗黒面をより深く理解し、官界の腐敗の本質を見抜いたあとに描き出した『戦城南』、『丁都護歌』のように深いものでは全くない。してみると『贈孟浩然』詩は、李白の個人的な悲哀の時期に限られたなながしかの欠点をまさしく表わしているものであり、李白が孟浩然を褒め称えたということを、孟浩然評価の根拠とすることはできない。もしこの時期に孟浩然が李白に対して影響があったとするならば、それは若干の消極的な影響でしかありえない。

そのほか、次のような意見を出す同志もいる。現在の大躍進の時代において、社会主義の思潮はすべての人々を激しく揺り動かしており、隠士の作品を少しばかり読んだことで、たとえ甚だしい悪影響を産み出さずとも、時代精神と相反する作品を読むことがひとりの人間く路次を指していようの進歩を阻みうるのだという事実を等閑視することはできない。古典文学作品の選集を出版する事業では、その主要な任務はく古典文学作品の普及にある。この種の選集は工農商学の青年の知識人の読

書に提供されるものである。青年の知識人の特徴は、性格が固まっておらず、批判能力がかなり足りず、よからぬ影響を受けやすいということである。もし少しでも注意を怠ると、間違った意見や学説が流布し、その害は少なくないのである。

以上の記事は、六人の投稿者の意見を総合して書いたものであり、記事作成の便宜上、それぞれの投稿者の名前を明記しなかった。各位のご寛恕を請う。

《文学遺産》編集部

〔注〕

- (1) 中間性作品は、中間作品とも呼ばれる。北京大学中文系文学専門化1955級集体編著『中国文学史（修訂本）一』（人民文学出版社、1959年）「緒論」9頁では「このく人民的な進歩的文学と反人民的な反動的文学」ほかに、反動的でもなく、また何ら人民性もたない中間作品が存在している」と定義している。
- (2) 本論のあとに発表された戴世俊「有没有“中間作品”」（光明日報1959.12.27文学遺産293）は、注（1）の定義を「階級性、傾向性がない作品」と換言し、中間作品は存在しないとした。しかし王健秋「「中間作品」与階級性」（同1960.1.17同296）・蔡儀「所謂“中間作品”的問題」（同1960.1.24同297）・胡錫濤「略談“中間作品”及其它」（同1960.2.28同302）において、文学作品はすべて階級性を有するのであり、人民性と階級性とは別問題であるとして、相次いで批判される。
- (3) 原文では、詩題の「秋」を「晩」に誤る。
- (4) 前掲②論文注（3）に同じ。
- (5) 原文「安」を「定」に誤り、「常」を「当（當）」に誤る。

④文川「『春暁』と『静夜思』から抒情短詩の問題について論じる」（1960.2.28）

我が国の古典抒情詩歌の芸術の特徴は何であるのか。これは興味溢れる問題である。先頃、文芸界においていくつかの討論がなされたが、そのいずれもははっきりと一致した結論はえられなかった。そのため作品を評価する場合、統一的な尺度と基準が欠けているとしばしば感じられ、したがって一部の抒情短詩の真の価値に対する深い理解の妨げともなっているのである。

『春暁』と『静夜思』は我が国の古典抒情詩中でかなり広く愛唱されており、近頃の評価も多岐にわたる作品である。そこでこの二首に対する私個人の鄙見を述べてみる。

この二首はともに五言絶句であり、思想的内容はまったく異なるが、芸術表現の技法には共通の特徴を多く備えている。

まず『春暁』については、描かれたのは春の朝のひとつときの詩人の少しばかりの体験である。季節はおそらく春の暮れであり、この時期、夜は穏やかに眠れて、春の宵を過ごしやすい。そのため詩人が目覚めるや、夜はいつの間にかすっかりと明けていた。

「処処聞啼鳥」——花が咲き鳥が啼くのはもとより春の一般的な特徴であり、暮春の時節では鳥が鳴くのはもはや決まった場所や時間での現象ではない。ほかでもなく鳥たちがにぎやかに鳴くことによってまだ熟睡している人たちが目覚めるということで、朝がすでにやって来たことを示している。これこそ詩人の春暁の最初の感慨である。この感慨は春の根本的な特徴——いたるところ生命力の呼びかけに満ちている——をしっかりと捉えているとともに、具体的に「不覚暁」つまりすでに何らかの時間になっていることを引き立たせているのだ。

後半の二句は直接的な知覚から離れて連想に入り込む。鳥が鳴き、すっかり明るくなり、空も晴れ、天気は何となく変化することか。しかし夜の風雨の様子を思い起こせば、木々いっばいに咲きほこっていた花はたぶん大方が落ちてしまったのではないか。

あきらかに詩人にはここで落花を傷み行く春を惜しむなにかしかの気持ちがあるのだけれども、全体的に見れば、一首はやはり主として生き生きとして活発な春の息吹に対する興味に満ちあふれてい

る。基調はやはり比較的軽快で清新であり、のちの才子佳人が春を傷み秋を悲しむ退廢的でつまらない態度とは明らかに異なるところがあり、それは人民にとって基本的に無害である。さらにそこに極めて洗練されて巧妙な芸術的技法が施されたために人々に人気があるのである。

しかしながら、詩の情趣は結局のところは主にやはり有閑階級のものであることも指摘しておかなければならない。当時の労働人民は「春眠不覺曉」ではありえない上に、「花落知多少」を心配するようなんびりとした気ままな気持は持たなかった。それ故、この詩の思想的価値について論ずるならば、高い評価をしすぎるのもよくない。この詩が孟浩然の孤高と現実に対する不満を表現していると説く人〈路坎〉もいるが、この種の拡大解釈にはかなり無理があると考ええる。ただもしこの詩が完全に消極的で意気消沈したものであるならば、私たちには極めて有害であり、徹底的に否定しなければならないが、それはそれでいささか行き過ぎの嫌いがある。

次に『静夜思』を見てみよう。この詩の構想の技法は基本的に『春曉』と同じい。描かれているのもほんの一瞬の体験である。しかし季節は春ではなく秋である。時間も朝ではなく深夜である。『春曉』と同様にこの体験がなされたのは詩人がまだベッドに横たわっている時であり、詩人の感情の波をかき立てたのは「床前明月光」である。秋の月は清らかに輝き、ベッドの前を照らし、地面いっばいに雪のように白く、そのため詩人はついには「疑是地上霜」と思った。というのは、この時期はちょうど「草木揺落露為霜 草木の枯れ葉が風に吹かれて落ち、露が霜に変わる」〈曹丕「燕歌行二首」其一〉の時節だったからである。しかも詩人は異境の地をさまよひ、たぶん心中とくに秋のものの悲しい気配を感じ取っていたのであろう。だからごく自然にこのような疑いの気持ちが生じたのである。そのあとよく見れば、霜ではなくて月の光であった。そこで頭をもたげ望むと、まん丸い月が空のはしにかかっていた。月はもっとも身内や親しい人を思い起こさせ、故郷を懐かしがらせる景物である。だからこの時、詩人は頭を垂れるや、感慨が同時に起って故郷を思い起こしたのである。

このような仰向き俯いて嘆き悲しむ心情には、やはり当然、士大夫〈伝統的知識人〉階層の烙印が押されている。しかし『春曉』と比べると、人民大衆とかなり多くの共通点がある。というのは、封建の動乱の時代にあつて、あまたの人々が流浪し落ち着く場所を失い、故郷を遠く懐かしむという悲哀はまさしく人民の苦難の一つでもあったからだ。それ故このような感情は、当時にあつては人々の同情と共感をたいそう引き起こすことができたのである。このことがこの詩がかねてより人々に特別に愛好されている最大の秘密であると思っている。ただもし「それらがみな封建社会の本質面と関連する現実をある程度反映しており、進んだ階級的傾向性を備えている」（文学遺産293期『「中間作品」はあるのか』⁽¹⁾）というならば、おそらくそれは過大評価であるはずだ。

以上の分析からこの二首の詩に共通する芸術上の特徴の一つ見いだすことができる。それはある自然景物とその変化に対する詩人の深い感銘を鋭敏に捉えるのに優れており、イメージを洗練する芸術的構想を通じて、それを深く生き生きと伝えることができているということである。このような芸術的特徴は、我が国のあまたの優れた古典抒情短詩と風景詩の中ではかなり普遍的に存在しているのである。

次に以下の点は強調しておかなければならない。思想的内容からすれば、詩人のこのような生活体験が、その大きさに関わらず人民の感情という海洋に通じてゆけるならば、意義がある。しかしそうでなければ、その意義はかなり少なく、あるいは人民にとって無益であるかもしれないのだ。これは抒情詩の価値を決定する根本的な条件である。ちっちゃな抒情詩と風景詩に論ずべき思想性がないと考える人もいるが、それはまさしくその芸術性を孤立的、一面的に分析したものであって、誤りであり、有害であると私は考える。

以上の分析より、このような抒情詩と風景詩は、その思想と感情がどれほど微細で曲折していたとしても、実際にはすべて階級性を持つことが私たちにもあきらかになった。この点は決してあいまいにしてはならない。しかしながら、これらの詩の多くはわずかな印象や体験を述べるだけであり、ま

た必ずしも深刻で鮮明な社会的内容を含んではいない。それ故、政治的傾向という点から見れば、この種の作品が反動的であるのか進歩的であるのかを判断するのは確かにすこぶる難しい。もしこういった意味から問題を理解するのであれば、北京大学の文学史の見解²⁾、そして蔡儀同志の最近の意見³⁾に基本的に同意できる。——しかし「中間作品」という名称が曖昧であることは間違いなく、誤解を引き起こしやすいので、別の名称に変更するのが穏当である⁴⁾。

〔注〕

- (1) 光明日報1959.12.27、戴世俊著。引用文注の「それら」は王維「渭城曲」「九月九日憶山東兄弟」、李白「静夜思」を指す。なおこの論は中間作品は存在しないという立場をとる。
- (2) 前掲③論文注 (1)『中国文学史(修訂本)一』「緒論」に同じ。
- (3) 前掲③論文注 (2) 蔡儀論文は同注 (1) の考え方を肯定している。
- (4) 最終段落で「階級性」「中間作品」に言及されるのは前掲③論文注 (2) に示した文脈においてである。

⑤ 経成鴻『『春暁』という詩に対する私の新たな理解』(1966.6.5)

私は大学の文科系の学生である。以前は、学校の教室に閉じこもって勉強＝現実と接していない、机上の学問>していた。その時、孟浩然の『春暁』詩を読むたびにいつも清新でなごやかなものを感じ、すらすらと口をついて出て読後の味わいは尽きなかった。とりわけ幾人かの専門家や学者の「解説」を読んだあと「その立場に立って考え」て思いをめぐらせると、さらにこの詩の言葉ではあらわせない素晴らしさを感じた。党は私たちを教え導き、無産階級の高い思想的次元に立って、過去の一切の文学遺産に対して分析を行い批判するよう求めた。だが私はこの小さな詩、よき詩は批判できない気がしていた。何を批判するというのか。この詩はわずか二十字であり、まさかここにも何らかの封建的な毒素があるというのだろうか。学术界において山水詩、花鳥詩は階級性を持たないと主張する人は、この詩を例とする。私もそれを十分に信じていた。労働人民も美しい大自然を好んだのであり、孟浩然のこの「純風景詩」も彼らに愛好されていたはずであると私は思っていた。このような思想に支配されて、春の朝、朦朧としたねむけをいただいたまま目が覚めた時はいつもこの「千古の名句」をおもわず口ずさんでいた。

春眠不覚暁、処処聞啼鳥。夜来風雨声、花落知多少。

以上が、私の以前の『春暁』詩に対する理解であった。

今年の春、私たちの学習生活にたいへん大きな変化が生じた。私たちは都市の学府<高等教育機関>から農村にやってくる、江蘇省溧陽県にある果樹園で労働しながら勉強をすることになった。毎日、果樹園の労働者や貧農下層中農とともに労働し、ともに生活し、ともに毛主席の著作を学習した。新しい環境、新しい生活によって私たちの思想認識にもいささか変化が生じた。私たちはもう誰も「春眠不覚暁」というような詩をうたえなくなっていた。そしてある時私たちが書物でこの詩に触れたとき、農村での実際の生活における鍛錬と教育のおかげで、私たちは真剣な思考を展開していったのである。以下にこの詩に対する私の新しい理解をいささか述べてみる。

『春暁』という詩はどのような詩であり、それは階級を超えているのであろうか。そうではない。社会意識は社会存在の反映である。階級社会においては、文学芸術(一首の小さな詩も含む)は階級の烙印を押されていないものはない。この『春暁』詩が映し出す生活と思想、感情に即していえば、この詩はひとりの封建地主階級の文人の作品でしかありえないのである。

第一に、この詩が映し出す「春眠不覚暁」というような生活は、労働人民には可能であるのだろうか。不可能である。一日中たらふく食い、何もしようとしない搾取階級にしてはじめて可能なのであ

る。彼ら旦那様や若旦那様は、一日目の夜に赤い灯火をつけて緑の酒を飲み真夜中までさわぐか、勉強机にすわって「之、乎、也、者くなりけりあらんや。文言文」を深夜まで読んで、そのあとやっと香のたかれたベッドの暖かい布団にもぐり込んで眠るのである。また次の日の日中には、しなければならぬことが何もないのですっかり安心して睡眠ができ、そのためぐっすり眠って夜があけたことにも気づかないのである。労働人民はどうであろうか。全くこのようなことはできはしない。農村で貧農下層中農とともに生活すれば、彼らの生活習慣がすぐにわかる。すなわち、早寝早起きし、夜がまだあけないうちから女性たちは朝ご飯の支度に忙しく、男性たちは野良に出て働き、子供たちでさえ牛を牽いて草を食べさせに行く。このような生活習慣は、彼らの長い歳月にわたる労働生活のなかでつかわれたものである。貧農下層中農たちに夜があけたことにも気づかないまで眠らせようとしても、それはまったくできないことである。今日の人民公社社員の人々の短歌を聞いていただきたい。

公社春来早、地勤人更早。東方還未亮、人已下地了。〈人民公社の春は早い。大地で働く人はもっと早い。東の空が白まないうちに、もう野良仕事。〉

これは労働人民の生活が彼らの詩のなかに映し出されたものである。「春眠不覚暁」といった有閑階級の生活とはなんと際だって対照的であることか。

もう一度述べよう。封建社会においては、おびただしい労働人民が厳しい搾取と圧迫のもと、暮らしはこれ以上苦しいものはないという状況であった。どれだけの貧農下層中農がぼろの掛け布団を一枚持つことができたであろうか。多くの貧農下層中農の一家の歴史は次のように私たちに語る。雨風がひどい春三月は、夜はまだ寒く、家族全員が一枚のぼろの掛け布団に身を寄せ、大人は苦しうなりに、子供は泣く。地主の旦那様のように暖かい家の香のたかれたベッドで気持ちよく眠り——夜が明けたことにも気づかないことなんてどうしてありえようか。

第二に、この詩が映し出す思想と感情、情趣、風流も、搾取階級の知識人であってはじめて持つことができるのである。労働人民の中で誰がきつくて忙しい春の朝に鳥の鳴く声に耳を傾けていられようか。更に誰が夜のあらしのあとに「花落知多少」などと問えようか。彼らはこのようなのんびりとして気ままな気持ちを持っておらず、さらに「流水落花春去也 水は散った花びらを浮かべて流れ去る、春は行ってしまった」〈李煜「浪淘沙」「簾外雨潺潺…」〉という感傷も持ちえない。労働人民の思想と感情は最も純朴であり、最も健康であるのだ。たとえ春の風や春の雨が彼らの関心をも引いたとしても、それはいつも田畑の農作物や農作業と関係があるのだ。彼らは麦の苗が春の雨に潤うことで喜ぶことができ、また花が咲いている果樹が大風で損なわれることで不安になりもするのだ。今年の春のある夜、大風が吹き、その時私たちの果樹園の果樹は花がまだすべて咲いておらず、大風にひとしきり吹かれてたくさんのつぼみが落ちてしまったのを覚えている。果樹園の労働者の同志はみな不安げに服をはおって起きあがり、このように言った。「こんちくしょう、風のやろう、おかげで俺たちが秋のおわりに実をどれだけ損することか。」夜はまだ明けていないのに彼らは果樹園に行っておわたくしきり働いた。このような有り様では、労働人民が孟浩然のように悠々と花がどれだけ落ちたか問うことなんてあろうか。絶対にありえない。

このように分析すると、以下のことが明らかになる。『春暁』という詩は、わずか四句、二十字しかないけれども、完全に封建文人の生活と思想、感情を映し出したものである。この詩は階級性を持たないのではなく、強烈な地主階級の感情に満ちあふれているのである。

以上が、私が農村に来てしばらく生活した後の『春暁』詩に対する新しい理解である。他の人にとってこのような考え方はきわめて浅薄であるかもしれないが、私にとってはたいへん大きな向上であると思う。「階級という観点から社会の様々な物事（文芸作品を含み、古典詩詞を含む）を扱う」⁽¹⁾と

いうことばについて、かなり具体的で深い理解を持ったのである。思い起こすに、私はどうして封建文人孟浩然の『春暁』詩に対してあのような鑑賞をしたのであろうか。どうしてこの詩の階級の実質を理解できなかったのであろうか。子細に考えてみるに、私の過去の学習生活が実践から離れ、労働から離れ、労働人民から離れていたからに違いない。私の生活において私の思想と感情が孟浩然と相通ずるところがあったために、彼の詩に対してとりわけ共感を起こしやすかったのである。年老いた貧農がこのような悠々とした詩を気に入るであろうか。ありえない。それとは逆に嫌悪の情を持つ持っただけだ。しかも私が労働人民の生活や労働人民の思想と感情を熟知していなかったために、『春暁』詩が人々すべてにある生活、人々すべてが持つ思想と感情を概括し反映しており、したがって階級性を持たないと考えたのである。事実が証明するように、これはなんと荒唐で危険であろうか。私は次のように深く理解するに到った。ひとりの青年学生が古典文学を本当に学んで身に付け、批判識別能力を持つことができるためには、実際の闘争の中に入り、労働者・農民大衆の中に入り、自己を鍛錬し、自己を改造し、自己を向上させなければならないのである。

(本文筆者は南京大学学生である)

〔注〕

(1) 毛沢東のことばと思われるが、典拠は未詳。

『光明日報』(1959-1966) 掲載孟浩然關係論文訳注稿

Articles on Meng Hao-ran reported in Guangming Ribao (1959-1966)

Yoshiharu KAWAGUCHI

本稿是《光明日報》(1959-1966) 所登載的孟浩然研究論文的訳注。論文計有下面的 5 篇。

- ①紅小兵「王維孟浩然的作品應如何評價？華中師院中文系在教學中展開討論」(1959.3.20學術動態)
- ②路坎「有沒有選“春眠不覺曉”這首詩？」(1959.4.5文學遺產254)
- ③《文學遺產》編集部「關於孟浩然及其《春曉》詩的爭論——來稿綜合報導」(1959.6.2文學遺產267)
- ④文川「從《春曉》和《靜夜思》來談抒情短詩問題」(1960.2.28文學遺產302)
- ⑤經盛鴻「我對《春曉》一詩的新認識」(1966.6.5文學遺產554)